# 生文研メール

10 号

平成21年1月1日

Ver.1.1.3

生活文化研究所
〒700-8516
岡山市北区
伊福町2-16-9
ﾉｰﾄﾙﾀﾞﾑ清心女子大学
e-mail
ricch@post.ndsu.ac.jp

目次

日本人と海藻のかかわり（10）
緑色を生かしたアオノリ・アオサ料理　今田節子　1
体験的生活文化史　昭和編　その十　新田義之　3
経済危機と西鶴　西鶴研究こぼれ話　10　広嶋　進　5
不思議な出会い（その十）
ホーレー写本「鯨・捕鯨資料」2　横山　學　6
編集後記・お知らせ

## 日本人と海藻のかかわり（10）
## 緑色を生かしたアオノリ・アオサ料理

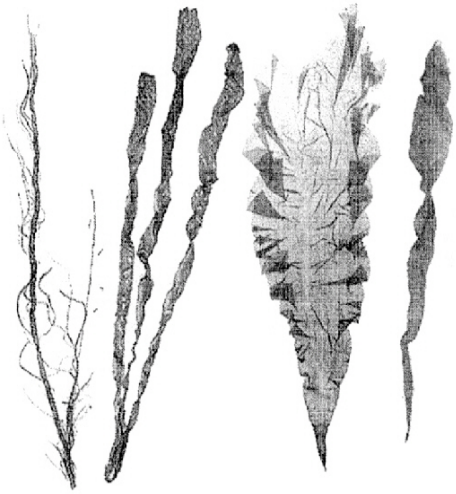
今田節子

『万葉集』や『古今集』などにはミルを題材にした詩歌が残されている。「海松」の文字で表される緑藻類ミルは、松葉に似た形状と鮮緑色のビロードの布地を連想させる外観をもち（図1）、古代人にとって賞翫に値する美しい海藻であった。しかし、ミルは他の海藻類に比べて食材料として多用されてきた海藻とはいえず、現在ではミルを知る人も少なくなってしまった。

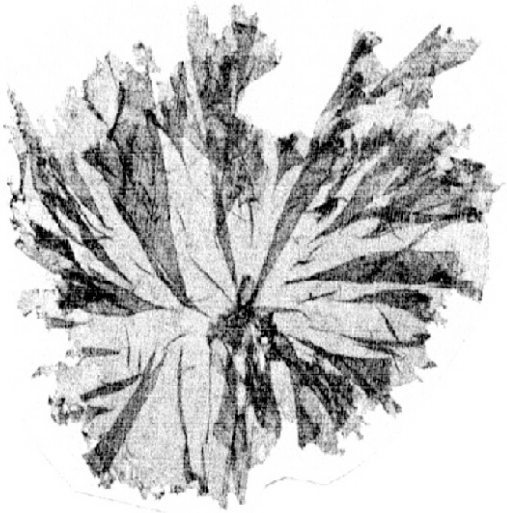
近世・近代・現代を通して食用緑藻類の代表はアオノリ、アオサである。しかし、聞き取り調査や文献調査を通してみると、両者は明確な区別がなされないまま利用されてきた可能性が高く、現在でもアオサをアオノリと呼んでいることも少なくない。おそらく自生する地域や藻体の色、乾燥方法、料理法など類似性が高いためと思われる。

緑藻類は暖海域に自生が適することもあって、アオノリやアオサは九州周辺や西日本の太平洋沿岸地域での採取、利用が多い。アオノリは海水と淡水の混じり合う河口付近、すなわち汽水域に自生が適し、ボウアオノリ、スジアオノリ、ヒラアオノリ、ウスバアオノリの種類があるが（図2）、自家用として採取される場合は、ほとんど区別なく採取されていたようである。現在でも高知県の四万十川で採取されるスジアオノリは品質がよく有名である。冬から春にかけて採取し、竿にかけて天日乾燥するが、塩がついたまま乾燥する場合と水洗いして塩を洗い流してから乾燥する方法がある。塩がついていると、湿った干し上がりになり、焼いてもバラバラになりにくい。ふりかけに使う場合は、水で洗って干すなどの工夫がみられた。また、量的には多くはないが、ノリのように板ノリに加工して保存することもあった。アオサについては味の良いヒトエグサが多く使われてきた（図3）。採取したものは手で丸く握ったり、平たく広げて天日で乾燥するなど、アオノリ同様に家庭での加工保存は簡単な方法で行われてきた。

【図1】ミル



【図2】右より、ボウアオノリ・ウスバアオノリ・ヒラアオノリ・スジアオノリ



【図3】ヒトエグサ（アオサの一種）

現在、ヒトエグサの養殖が行われている四万十川河口付近では、水洗いして細かく切り、大きな板状に広げて天日乾燥したものが出荷されている。

アオサに関する近世以前の記録は少ないが、アオノリについてはすでに平安時代の辞書『和名類聚抄』に記載がみられる。江戸時代になると『大和本草』や『庖厨備用倭名本草』に三十センチ余りの長さで美しい緑色をしており、髪の毛や乱糸のような形をもつとあり、スジアオノリを指していたと思われる。性質については、江戸時代の本草書『本朝食鑑』などに「無毒、冷で塩からい」、「温で甘い」という相反する内容がみられ、おそらく前者は生のアオノリを、後者は加工された乾燥アオノリを指し、両者の性質の違いを認識して使用していたものと思われる。食べ方についても室町時代の『庭訓往来』に「酢菜」とあり、江戸時代の『庖厨備用倭名本草』には「乾かしてほじしや肉とあつものにする」とある。「酢菜」は酢の物を、「ほじし」は干物を、「あつもの」は汁気の多い煮物や汁物を指すことから、乾燥アオノリの美しい緑色を生かして酢の物や煮物、汁物に利用されたと想像される。

明治時代以降の伝統的食生活のなかにあっても、美しい緑色を生かしてアオノリをかき餅に入れたり、汁物や酢の物、浸し物の青みに、また、あぶって香ばしさを生かしてふりかけにもされた。行事食としては、板ノリに加工されたものをひな祭りの巻きずしに使うところが多く、小豆島では「祝い粉」と称してアオノリの粉末を正月雑煮に、九州地方ではアオノリ汁を祝い事の客膳料理に使う習慣があった。アオサの料理法もかき餅に入れる、焼いてふりかけにする、汁物にするなど、アオノリ料理と同様なものがみられたが、さらにア

オノリより調理法は多彩である。アオサ雑炊、煮物、和え物、酢の物、天ぷらなど葉菜類に近い食べ方がなされている。九州地方では客の料理として、四国でも出産祝いや宮参りの料理にアオサ汁が作られていた。また、アオサを一緒につきこんだ餅が正月雑煮として使われていたり（徳島県）、ヨモギの代わりに草餅に入れる（高知県）、ちらしずしの青みに使う（山口県）など、アオノリやアオサが比較的多く自生する九州地方や四国地方を中心に行事食としての利用もみられた。アオサ汁の例を紹介すると、澄まし汁に豆腐とアオサ、しらすを入れたあっさりした春の汁物（徳島県）や、干ぼかし魚（魚の干物）の身をほぐし入れた味噌汁に最後にアオサを入れたもの（鹿児島県）などがある。生のアオサを入れると一層色も香りもよいが、海水で洗って干したアオサを汁に入れても生のアオサに劣らない青々とした色がでる。海水の潮気が青い色を引き出してくれる作用があると伝えられている。

　このようにアオノリ、アオサ料理は美しい緑色と香りが春らしさを運んでくれる料理であり、海藻類の中で最も葉菜類に近い料理が作られてきたといえよう。すなわち、日本人の海藻利用の特徴である sea vegetable(海の野菜)としての利用を顕著に反映した食習慣とみなすことができる。

【主な参考文献】

（1）宮下章『海藻』、法政大学出版局、一九七四年。（2）源順撰「倭名類聚抄」（九三一～九三八年）、京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』本文編、臨川書店、一九七七年。（3）貝原益軒「大和本草」（一七〇八年）、益軒会編纂『益軒全集』巻之六、益軒全集刊行部、一九九一年。（4）向井元升編「庖厨備用倭名本草」（一六八四年）、上野益三監、吉井始子編『食物本草本大成』七巻、臨川書店、一九八〇年。（5）人見必大著「本朝食鑑」（一六九五年）、人見必大著、島田勇雄訳注『本朝食鑑』第一巻、平凡社、一九七六年。（6）『古事類苑』植物部、吉川弘文館、一九八五年。（7）今田節子『海藻の食文化』、成山堂書店、二〇〇三年。

## 体験的生活文化史　昭和編　その十

新田義之

　昭和二十五年に始まった朝鮮戦争は、私が大学に入る一年前の昭和二十八年に終わっていたが、朝鮮半島に出兵したアメリカ軍の補給基地として日本はいわゆる戦争特需に沸き、急速に経済復興に向かって走り出していた。その恩恵が少しずつ一般家庭に及び始め、便利な家電製品が次々に開発されて爆発的な売れ行きを見せるようになったのもその頃からである。電気釜、電気洗濯機、電気冷蔵庫などなどが庶民の生活を変え始め、ＮＨＫがテレビ放送を東京地区で開始したのも二十八年で、翌年には大阪と名古屋にもテレビ局が開局された。

　その反面、朝鮮戦争を境にして日本に対するアメリカの占領政策が変化し、これまでの急激な民主化推進の姿勢から、反戦と反権力の国民運動を弾圧する方針に移りはじめた。すなわち日米安保条約体制の保持と日本の軍備強化を、日本政府に要求するようになってきたのである。

　このように戦争景気による日本の経済力の上昇と、敗戦直後の楽天的民主主義謳歌の気分を吹き飛ばそうとする逆風との狭間で、私も富家の子どもたちの受験勉強の相手をして生活費を得たり、国会議事堂の周りを廻る再軍備反対のデモに誘われたりして日々を過ごしていた。また三歳年上の従姉が東京女子大の学生だったので、よく一緒に音楽会や講演会などにも出かけた。ウイーン交響

楽団の第一回の来日は昭和三十一年四月で、その折の指揮者は高名な作曲家のヒンデミットだった。この年の九月にはイタリアオペラが来た。これは切符が買えなかったので、従姉の知人でテレビ受信機を自分たちで組み立てた若夫婦のお宅に伺い、テレビでオペラの上演を見せてもらった。自家にテレビを持っている家庭など殆ど無かった頃のことである。

さて無事に前期二年間の教養課程を終えた私は、昭和三十一年四月に教養学部の後期課程である教養学科に進んだ。そこでドイツ文化を専攻したが、学生生活の中身はどなたも皆大同小異であろう。個人的な思い出は多いが、ここでは割愛することにしよう。この時代を象徴する事件はと言えば、昭和三十二年十月にソ連が人工衛星第一号スプートニクの打ち上げに成功し、焦りに焦ったアメリカがエクスプローラ第一号を、ようやくその三ヶ月後の三十三年一月に発射したことがあげられよう。

三十三年になり教養学科ドイツ科の卒業が近くなるに従って、これまで真剣に自分の進路を考えないで来た私も、直ぐに実社会に入って行こうか、それとも好きな文学や語学に専念するために大学院に進もうかと迷うようになっていた。当時は外国に行ける人の枠が極端に狭く、文部省留学生ないしは外国政府の招待留学生になるか、外交官試験に合格して外地勤務になるか、あるいは貿易商社か銀行に入って、外地の支店に派遣されるかしか可能性がなかった。早くドイツに行きたかった私には、これらの道のうちのどれを選択するかが決心のしどころと思われた。私費留学という道もないわけではなかったが、それには、当時としては大金の百万円を越す銀行預金のあることを証明する書類が必要だった。一ドルが三六〇円の固定相場で、しかも政府の許可がなければ一ドルたりとも入手できない、本当に窮屈な時代であった。

結局私は外交官や官僚、ないしは実業の世界に入って仕事をするだけの体力も競争力もないということから、婚約者との合意の上で最も自分の好む道に進み、大学院で比較文学を専攻することにした。学部時代から主任教授の島田謹二先生の講義を聴いており、先生のもとでなら各国文学の枠に捉われない自由な研究が出来ることが魅力だったので、学部シニアコース時代からの指導教官菊池栄一先生にお願いしてこの課程を受験し、無事に合格して修士課程に入れてもらったのである。

当時の大学院生には既婚者も珍しくなく、私たちもこの年（三十三年）十月に結婚した。妻は音楽大学を卒業して私立の音楽学校で教えており、私も小田原の私立高等学校の非常勤講師になったので、なんとか生計はたてられた。学部時代に取っておいた教員免許が役に立ったわけである。また当時は子どもを音楽家にしようと望む親が多く、音楽大学を受験する生徒が沢山いたから、妻も仕事をみつけるのに困るということはなかった。

こうして一年が終わり、修士課程の二年目に入った春に、思いがけない機会が訪れた。ドイツ政府が東京にドイツ文化研究所を開設し、この研究所の開設の式典のためにエアハルト経済相（後の首相）が来日して、記念の事業として日本全国から二人、上智大学から二人、計四名の若手研究者を留学生としてドイツに招聘する資金を提供したのである。

この基金による奨学生の採用試験に合格し、妻もその間に私費留学生試験を突破して、私はハンブルク大学に、妻はハンブルク国立音楽大学に留学することになった。そしてこの年の八月に横浜港からヨーロッパに向かったのであった。

私たちが乗ったのはドイツ政府の指定により、

フランス郵船（メサジェリ・マリティーム）のラオス号という客船で、かつて森鴎外が留学の際に利用したのと同じ航路であった。出航は八月一日だったと記憶する。この船でアジアの諸国に立ち寄りながらスエズを通り、マルセーユに着くまでに四十日ばかりを要したが、ヨーロッパに入る前にアジア諸国を瞥見する機会が与えられたことは、運命の神にいかに感謝しても足りない幸運であった。このことをすこし詳しく思い出しておきたいが、今回はもう紙数が尽きたので、船旅をする私の目に当時のアジアの港町の様子がどのように映ったのかは、次回以降にゆずることにしよう。

## 経済危機と西鶴

### 西鶴研究こぼれ話　10　　広嶋　進

金融をめぐる昨今の国際情勢は激動期を迎えている。しかし経済と人、カネと人という視点からすれば、三百年前も今も同じことを繰り返しているように思われる。

西鶴は『世間胸算用』（元禄五年〈一六九二〉刊）に次のような話を書いている。

さる男が振り手形というものを新しく考え出した。主人公の男も、その真似をして親しい両替屋に、十一月の末から銀二十五貫目（今のお金で二千五百万円ほど）を預けて、手形で決済することを考えついた。

十一月の末からというところがミソで、当時は十二月は一年の収支決算の大事な時期だった。男は集金に来た商人に、例えば米屋、呉服屋、味噌屋、紙屋、魚屋の商人に、それから観音講の積立金も遊廓の揚屋のツケも、なんでもかんでも、「両替屋で受け取ってくれ」と言って、現金では支払わずに振り手形を一枚ずつ渡した。そして「支払いはこれで全部終了だ」として、大晦日の住吉神社参りに出掛けてしまった。

ところが、男は預けた銀二十五貫目に対して、八十貫目の手形を切っていた。両替屋はそのことに気付き、「計算してからあとで後で渡そう」と言って、支払いを一時中止した。

借金取りたちは、自分たちの支払いを男の手形で済まし、それを受け取った商人もその振り手形を次々に先へ渡して、結局最後に受け取らされた商人が役に立たない振り手形をカネの代わりに握って新年を迎えた。一夜明ければ目出度い春となった。（巻一の一「問屋の寛活女」）

実体のない紙切れをババ抜きのゲームのように掴まされて、そのババを次々に先送りにして話は目出度く終了する。しかし、本当に目出度いのかというと、この先送りした紙には対応するカネはなく、虚構のカネに過ぎない。このあとどうなるかについては作者は書いていないが、主人公の男の倒産が待っているはずである。

西鶴は空手形で大晦日の決済を切り抜けようとした主人公の愚かさを描いているが、同時に、実体経済から離れたところで動き出した資本主義経済の危うさをも描いているようである。

経済学者の岩井克人氏はこのたびの金融危機について言う。

資本主義はなぜ不安定なのか。それは基本的に投機によって成立しているからだ。（例えば自動車をつくるのは）将来だれかが乗るために買ってくれるという予想のもとにつくる。（略）株式、債券、為替といった金融市場は、実需とほとんど関係ない。（略）ほとんど投機によって動いている。（略）貨幣自体が投機なのであって、結局、貨幣の信用は「みんなが貨幣であると思っているか

ら貨幣だ」という自己循環論法で支えられているにすぎない。（略）今回の金融危機には、この貨幣の問題のエッセンスが入っている。（略）隠されたリスクだったサブプライムローンが破綻すると、ドミノ倒しのように、すべての金融商品の信用が失墜したのが、今回の危機の本質だ。（「経済危機の行方」『朝日新聞』二〇〇八年十月十七日朝刊）

先の主人公は破産することが分かっていながら、なぜ空手形を発行して、その場しのぎの切り抜けをしたのであろうか。自らのプライドを守ろうとしたのであろうか、あるいは商売というものはこんなものだと考え、住吉大社に一時避難をしたのちにまたやり直そうと考えたのであろうか。本文には次のごとくにある。

「万しまうた」とて年籠りの住吉参り、胸には波のたたぬ間もなし。こんな人の初尾は、うけ給うてから気づかひし給ふべし。（「全部支払いは終わった」と言って大晦日の年籠りの住吉参りに男は出かけた。しかし不安でいっぱいで、一瞬たりとも心に波風の立たない時がないはずである。こんな人の賽銭は住吉の神様だって心配で、もらわれたところでお気遣いなさることだろう。）

男の様子は、倒産が控えているにもかかわらず、さほど深刻には描かれてはいない。まるで破産と起業と繁盛を繰り返すのが、商いの道であると考えているかのようである。また空手形を先へ先へ順送りする借金取りのてんやわんのありさまも、商行為の戯画として書かれているようにも見える。

さまざま詮議するうちに、また掛け乞ひもその手形を先へ渡し、後にはどさくさと入り乱れ、（さまざま調べるうちに、また借金取りもその手形を支払いに使い先へ渡し、後にはどさくさと入り乱れ、）

右のドタバタ騒ぎの場面から私は、サブプライムローンを国を挙げて証券化・商品化したアメリカ経済の混乱のありさまを連想してしまうのである。

## 不思議な出会い（その十）
## ホーレー写本「鯨・捕鯨資料」2

横山　學

この夏、前号で紹介したホーレー所蔵の鯨絵巻物を確認するために、ボストン北部にあるピーボディー博物館（Peabody Essex Museum, 1799創立）に出かけました。博物館のあるセーラムは古くからの港町で、現在も当時の桟橋と行政の建物がそのままに残されています。ここから世界各地に多くの船が出掛けて行きました。帰りの航海には多くの貴重な品々と珍しい話が「土産」として持ち帰られました。「喜望峰を超えて」航海した船長たちは、定期的に会食し、「手柄」を披露し、互いの情報を交換し合いました。こうして東インド海運協会が生まれ、やがて海難の相互扶助のしくみも加わり、寄贈された品々を飾るための施設が造られ、博物館となりました。大森貝塚を発見し、日本に考古学や人類生態学の基礎をもたらしたE・S・モースは、第三代目の館長です。モースの集めた日本の磁器・看板・根付などは、この博物館に収められています。

目指す絵巻物（美術品）のひとつは「小児ノ弄（もてあそび）鯨一件ノ巻」でした。捕鯨の道具や鯨の種類、捕鯨の方法が、鮮やかな色彩で細かく描かれています。二十五センチ幅の巻物仕立てで、全長を測ることはできませんでしたが、Ｗｅｂ公開の内容と現物を照合できました。そしてホーレーの蔵書印「宝玲文庫」を確認しました。もう一件は「養和筆捕鯨」、軸様式（百四十八×七十一センチ）で、鯨を追い込み、船から銛を打ち込んでい

る様子が描かれたものです。これにはホーレーの蔵書印はありませんでした。右下に「養和」の名がありましたが、今のところどのような人物なのか分かっていません。記録から、一九八〇年と一九八二年にルースロップ（Francis B Lothrop）がこの二点の絵巻をピーボディー博物館に寄贈していることが知れました。

さらに、ホーレーの著書『Miscellanea Japonica II』「日本における鯨と捕鯨」（限定百二十五部・通番第四十一号）が、「offprint」版（二件）と共に博物館の図書室（Phillips Library）に所蔵されていました。同じくルースロップから寄贈されたものです。後者の「offprint」版は、本編の刊行に時間を要したために、購入予約者のために限定五〇部として作成されたいわゆる臨時版です。本編と同じ手漉紙に同じ手法で印刷され、同じ装幀がほどこされています。ホーレーは通常、所蔵の和装本には蔵書印、洋装本には和紙にエッチングした蔵書票を貼り付けています。二冊の「offprint」版には、博物館図書室の蔵書票と共にホーレーの蔵書票があり、「Dr.George Kerr」と「To Mr.Francis B Lothrop with the Compliments of（不明月、22.1960)」とペン書きされていました。ジョージ・カー（Dr.George Kerr）は『Okinawa:The history of an Island People (琉球の歴史)』(1958)の著者で、ホーレーとは太平洋戦争以前からの知り合いです。カーは一九六〇年代にハワイ大学構内の東西文化センター(East-West Center)で、崎原貢と共に沖縄を調査して琉球史料の収集に努めました。このことは『生活文化研究所年報』第二十一輯「崎原貢「琉球史料探訪記」」に詳しく書きました。

ルースロップ宛の書き入れのあった蔵書票添付の「offprint」版には、百部限定の「prospectus」(見本刷)版が一緒にありました。さらにホーレーの記した書簡(一九六〇年三月三十日付)が添えられてありました。書簡の宛名は「マツズミ」(H.Matsuzumi Esq）です。興味深いのは、二巻の軸物と二冊の「offprint」版、そして一冊の「prospectus」版が、何時どのような経緯で博物館に収められたかということです。

ルースロップ（Francis B Lothrop、一八九八～一九八六）は、代々商船船長を務めた家に生まれ、多方面にわたる収集品を受け継いでおり、鯨絵画の収集はそれらのごく一部です。鯨絵画の収集品をまとめた目録の序文には、複数の資料購入先の氏名とともに、収集を助けた友人としてPhillips HoferとPaul Blumの名が見えます。ポール・C・ブルーム(Paul C. Blum、一八九八～一九八一)は、在日した日本関係書物の収集家として著名です。ブルームの蔵書約六四〇〇点は神奈川県の横浜開港資料館が購入しました。彼もまたフランク・ホーレーと書物を通じて親しい間柄でした。

これらのことからピーボディー博物館へ集まったホーレー資料の経緯を、次のように推理いたしました。海洋関係の資料収集を長年続けていたルースロップは友人のブルームを通じて、ホーレーの蔵書の内容を知っていたのでしょう。ホーレーの蔵書「宝玲文庫」は、質の高さと内容の豊かさによって、多くの蔵書家たちに知られていました。この時期には、ホーレーに蔵書を手放す意向のある事も聞き知っていたかもしれません。日本に旅行したルースロップは山科のホーレーを訪ね、「小児ノ弄(もてあそび)鯨一件ノ巻」を入手しました。同時に『Miscellanea Japonica II』「日本における鯨と捕鯨」の「offprint」版と「prospectus」版をホーレーから譲られたのです。「prospectus」版は購読予約者を募るために一九五八年十月に作成したものです。その時手元にあった「offprint」版にホー

レーは署名してルースロップに贈り、さらに「prospectus」版を添えました。「prospectus」版の頁の間には、一九六〇年三月に「マツズミ・H」に対して購入の予約を求めてしたためていた書簡が挟み込まれたままの状態でした。

ルースロップ宛ての蔵書票に記された月日は、ペン字の文字が少し乱れて月名が判読できません。一九六〇年末には、ホーレーは体調を崩して入院し、翌年の一月十日に亡くなりました。本編（限定百二十五部）が河北印刷所から仕上がってきたのはその後で、家族の島袋久さんが予定の配布先に届けました。今回の調査期間中に、博物館のJ・マセラ氏から「一九六一年にルースロップは相撲のポスターを博物館に寄贈しているという記録がある」という情報を得ました。このことは一九六〇年三月以降に、ルースロップが日本に旅行している可能性を裏付けています。ホーレーがG・カーに贈った「offprint」版は、カーの手から別途にルースロップに届けられました。ホーレーの手元に残されている配布記録には、「ブルーム」は八番目、「カー」の名は二八番目に記されています。カーもホーレーの鯨研究と著作の情報を得ていたのです。

---

調査の出発前に江戸東京博物館に小澤弘氏を訪ねました。そこでピーボディー博物館の目録『Whaling Prints in the Francis B. Lothrop Collection』(by Elizabath Ingalls)を目にしました。偶然のことですが、この夏の出会いのために非常に幸いなことでありました。

**〔ホーレー収集の郷土玩具〕**

**【編集後記・おしらせ】**研究所員の出版物を紹介いたします。新田義之著『東北大学の学風を創った人々』東北大学出版会、平成二〇年六月。在庫の少なくなった年報の保存分を確保するために、PDF版の作成を始めました。これに伴い、在庫分の年報をご希望の方に送料実費でお分けいたします。ご希望輯号をお申し出ください。これまでの生活文化講演会の演題一覧・『生活文化研究所年報』既刊目次・「生文研メール」（カラー表示）の全文を下記のWEBでご覧になれます。

http://www.ndsu.ac.jp/1000_guid/1700_inst/1730_la02/1730_la02_org01.html